

---

# ねこみみ

弥月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ねこみみ

### 【Nコード】

N5513V

### 【作者名】

弥月

### 【あらすじ】

ネコミミのカチューシャがなぜか持っていて……。

藤崎総受け小説。

pixivにも載せております。

今、手に持っているものに安形は首を傾げた。

何故か、カバンの中にネコ耳のカチューシャが入っていた。

可愛らしいネコ耳カチューシャが、黒と白。

なぜか自分のカバンの中に、入っていたのだ。

安形は無意識に眉間にシワを寄せてしまう。

なぜカバンに入っていたかをよく状況を思い出してみた。

（そういえば、こないだ将棋の勝利品で貰ったが、それはミモリンに渡したし……。あっそういやまた別で貰ったかぁ。流行ってんのかネコ耳。で、間違えて学校に持ってきたってところだろう……。ってどんだけ寝ぼけてたんだよ！！）

思い出した事柄に自分自身にツツコミを入れた。

頭を掻きながら、持っけていても仕方ないから、とりあえず机の上に置く。

今日は一番乗りに生徒会室に來た訳だし、4時の定例会議にもまだまだ時間に余裕がある。

昼寝しても構わないだろうと安形は自分の席に座った。

日差しも穏やかだし、柔らかくフィットする椅子に、うとうと意識を飛ばしかけたとき、ガラリっとドアの開く音がした。

飛びかけていた意志が若干引き戻され、ちらりとドアの方を見る。生徒会の誰かだろうと思っていたが違った。

気まずそうに入ってきたのはボッスンこと藤崎だ。

あたりをきよるきよると伺っている。

大きなあくびをしながら安形は、涙が出てくるのを堪えて、

「どうした、藤崎。また何か備品壊したか？」

「あっやっぱりわかるか」

「かっかっか、前にも言っただろ？お前がここに来る時は何かを起こしたときぐらいだからな。今日は何を壊したんだ？」

すっかり眠気も冴えて、安形は笑いながらボッスンに聞く。

「今日はって言うなよ。なんか毎回壊してるみたいじゃん」

むすっとした顔で、ボッスンは答えると、安形はにやっと笑って、

「そういつてこないだ窓ガラス割ったのは誰かな？」

「うっ」

「まあどうでもいいけどよ」

安形は立ち上がって、藤崎の前に立つと一枚の紙を差し出す。  
ボッスンはその紙を受けとる。

「始末書だ。事情聴くのめんどくせーし、空いてる席で書いてくれ」

「って聞くのめんどくさいのかよ！ー」

安形に突っ込みを入れつつ、ボッスンは安形を睨んでから適当にな椅子に座り書き始めた。

安形はさっきのやりとりで目が覚めてしまったため、昼寝をする

のはどうするか悩んでいた。ぼーとボッスンを見ていたらふと思う。

（そういや、ツノ帽子外した姿ってあんま見ないよなあ。あっ……カチューシャしたらどうなるかな……）

そう思考が過ると、つい試したくなるものだ。

「なあ藤崎」

「なんだよ」

「帽子取ってみてくれよ」

「はあ？なんでだよ！」

「見たくなつたから」

「却下。俺は今書く事で必死なんだよ！！椿にバレたらどうなるかわかつてるだろ！」

ブスつとした表情は変えないで、ボッスンは書き続ける。安形は顎に手を当てて、考えた振りをしながら、

「じゃある条件をしたら書かなくていいのはどうだ？」

「えつまじー！！」

「マジ。椿にも秘密にしてやるよ」

にやりと笑う安形の姿に、ボッスンは気付かず、

生徒会長の机に身を乗り出して聞く。

「で、条件ってなんだよ」

「これ、つけてみるよ」

そう差し出されたのは、黒色の力チューシャ。

藤崎は安形と力チューシャを交互に見ながら怪訝した顔で、

「なんでこんなのが生徒会室にあるんだよ!!」

「まあ堅い事はいいじゃないか」

「よくねえーよ!!俺はネコ耳力チューシャしないからな。まだ始末書の方がましだ」

パンツと机をたたく藤崎に対して安形は、すました笑顔を变えないまま。

「椿にいつちやおうかな」

「あっおまえ!!ひっ卑怯だぞ」

絶対椿のことだ『貴様、いいかげん学習ってものがないのか!!』  
等とガミガミ言われるに決まってる。

考えただけでめんどくさい。

それを察したのか安形は、

「別にいいじゃねえか。ただつけるだけだろ?」

「……ちつ仕方ねえな。……ちょっとだけだぞ」

そういうと、ボッスは帽子とゴーグルをとり、ためらいつつも力チューシャをつける。

だが付けると言った目の前の男は、プルプルと小刻みに肩が震えている。

これはどう見ても……

「なに笑ってんだてめえ!!」

「いや、すまん。似合いすぎて」

「似合ってね!!俺は帰る」

ボッスは帽子とゴーグルを素早く掴み、安形に背を向けたが片手をぱしっと掴まれた。

むくれた顔を安形に向けると、

「まあまあ。ちょっと待ってるよ」

「なにが待てだ!」

「もうすぐ、あいつらもくるからよ」

「あいつらって誰だよ!どうせ生徒会メンバーだろ」

「いや違う」

そう安形が言い切ったとき、思い切りバンツとドアが開く音が聞こえて、振り返れば、ヒメコとスイッチだ。

なぜ彼らがここに来たことに思わずぼかんとしてしまったボッスン。  
ヒメコは、頬を赤く染め上げて勢いよくボッスンに近づき、

「ぼっボッスン!!!めっちゃかわいい!!!!!!なん  
やの!なんやの!めっちゃ似合うやん!!!!!!」

「ぎゃー!!似合ってねーし、ちょっと迫るのやめて!」

「やめへん!もっと近くで見せろや!」

「たしかに、ヒメコが絶叫するのもよくわかる。ボッスン可愛いぞ  
(\*´、´)b」

「そんなこと言ってないでスイッチ助けろよ!」

『ガンバレ ボッスン(笑)』

「笑うな!」

けたたましい声で叫ぶボッスン。

二人してにやにやが止まらないようである。

「ところでなんでお前らも生徒会に来てんだよ」

ボッスンはヒメコと距離を置きながら、スイッチに話しかける。

『それはこれだ』

スイッチはパソコンを向けて、メール画面をボッスンに見せた。  
すると、ボッスンの顔がみるみる赤くなっていて、安形に迫る。

「なんなんだ！！これ！！あんだだろ！！！！」

「あら、バレた？」

「バレた？じゃねえよ！！」

「いいやん、会長さんのおかげでうちら、いいもん見れたし」

『まったくだゝ（ ）ゝ』

ほくほくする二人をボッスンが睨み。

「いいからお前ら黙っててくれる？」

改めて安形を問いつめようとボッスンは顔を向ければ、後ろからス  
イツチの声とヒメコが頷きあうような会話をして、

『だってボッスンの可愛い姿が見れるぜってメールされればね』

「行かないわけないやん」

ねえーと頷きあっている。

ボッスンのイライラが頂点に達したときに、また生徒会室のドアが  
ガラリと開く。

そこには、椿が立っていて、いつもより険しい顔をしているようだ。

「貴様ら、いったい何を生徒会室で騒いでる居るんだ！！」

椿はぐるっと辺りを見渡して、ボッスンに目を止める。

「藤崎……それは趣味か？」

「ちがー！ー！ー！う！ー！ー！趣味じゃない！ー！ー！ー！」

「じゃアレか、ネコ探しか？」

「なんで！？なんでネコ探しで！？ネコ耳カチューシャなわけ？  
普通違うだろ！！」

ボッスンの声がまた生徒会室に響き渡る。

叫びすぎたためにボッスンは、はあはあと息が荒い。  
椿は首を傾げて、

「そうなのか？榛葉先輩がそれをつけて、語尾に『にゃー』とつけ  
れば見つかると言っていたが」

「お前……それ完全に遊ばれてるから！」

「いやそんな筈はない！！だって飼い猫なら多少人間の言葉がわか  
るはず！！にゃーをつければ完璧だ」

椿は握り拳を作り、断言したが、ボッスンは力一杯否定して、

「それはなんのだ！！ぜってー違う！！」

「まだ言つか、藤崎！！」

「まあまあ、落ち着けよ椿」

やっと仲裁に入った安形だが、よく見ると口元が笑っている。  
空気ヨメ男なため椿は気付いてないが。

「会長。なぜスケツト団がいるんですか？」

「ああ。それは俺が呼んだだけだから気にするな」

かっかっかっとな笑う安形に、はあと椿も頷いた。  
ヒメコとスイッチは見合い。

『我々も部室に帰るか？』

「せやな」

「じゃ俺も」

「藤崎は待った」

「なんでだよ!!」

ヒメコたちの後について行ったのに、ふて腐れた表情で安形を見る。  
安形はにやりと笑って、

「実はもう一つカチューシャがあるんだが……」

『それはねこみみか？』

スイッチは振り向いて安形を見る。  
それににやっとなわらって、

「ああ。食い付きいいな。で俺は椿も見たい」

「はあ！？ぼつ僕ですか！？」

「だったら勝手にやってろよ！！」

ボッスはぷいっと顔を背ければ、ヒメコがこつ輝いている笑顔が目に入った。  
思わず、引け腰になり、

「ひっヒメコ？」

「ええやん！それええやん！！ボッスンと並んでる椿みたいわ」

「えっえっヒメコさん。帰ろうって言ったじゃん」

『そんな美味しいもの見逃せないぜ（\*ゝ・）b』

「スイッチも食い付いちやうわけ！？椿否定しろ！！」

「会長が見たいなら僕は別に……」

「って付けちやうのかよ」

全力でボッスは椿にツッコミを入れ、  
その様子を安形は笑っている。

ボッスはどうか回避策はないかとあぐねていると、またドアから、

「まあ。椿くんも藤崎くんも面白い格好してますわね」

ミモリンはうふふと微笑んで、デージーこと雛菊も、

「かわいいなあ。モイモイには負けるが…」

表情を変えないまま言った。

ボッスは耐えかねて、

「なんで生徒会メンバーがぞくぞくと揃って来るんだよ！」

『それはそろそろ定例会議の時間だからじゃないかボッスン』

「そうかよ。ってなんでお前が説明してるわけ!!」

「そんなのええから、写真撮ろう、写真！」

ヒメコはスイッチを押しかけて、どこから持ってきたカメラで騒いでいる。

それに悪のりなのか安形も、

「いいじゃんヒメちゃん。俺にも写真ちょうだい」

「ええで！さあお二人さん揃って揃って!!」

なぜか仕切ってるヒメコにボッスは減なりする。

だって高校生にもなってまさかのねこみみ……。

隣の椿を見れば、いつもどりのキリツとした姿で動じていないようにみえる。

「ボッスン笑えや、せつかくのネコ耳台無しやで」

「……そういわれてもヒメコ」

ボッスンが弱音を吐けば、ミモリンがぱつとひらめいたように声を  
出して、

「藤崎くんがやる気がでないのはまだオプションが足りないせい  
ですわね？」

なんのことだろうと、みんなの視線がミモリンに集まると、うふふ  
と表情を変えず、外が騒がしくなってきた。  
窓を見れば丹生グループのヘリが見える。

「ねこみみといえは、しっぱも必要ですわよね？」

にこやかに笑う笑顔がボッスンにとって今日最大の恐怖になった。  
この後、どんな姿で撮影されたかはご想像におまかせします。by  
ボッスン

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5513v/>

---

ねこみみ

2011年8月24日12時31分発行